



巻頭言

## 暮しは低く思いは高く

福井俊郎\*



《暮しは低く、思いは高く》、私がこの言葉を知ったのは戦後間もなく、ぜいたくをしたくても、まず物が無い頃であった。手にする教科書は一枚の新聞紙のようで、切りも綴じもしていなかった。その頃に、うす汚れたザラ紙ではんの薄い文庫本（アテネ文庫）を書店で見かけるようになった。刊行の言葉の中に、このワーズワースの詩の一節が引用してあった。

ある友人の結婚披露宴のうちに、私はこの言葉を紹介しながら挨拶をした。会が終わって、一人の紳士が私のところへ来られた。「君の話を聞いて、自分は昔のことを思い出した。金満家の令嬢と結婚するという友人を諫めるのに、あの言葉を使ったのだ」ということであった。その人は、美津濃の副社長（当時）水野健次郎氏、阪大理学部先輩でもあった。

米国に留学したおりに、派手な消費生活を目の当たりにして、消費こそは生産につながり、社会の発展をもたらすのだろうか、と

考えもした。しかし、機会があると、私はワーズワースの言葉を若い人たちに語り続けてきた。「先生は、今時の若い者に、なんと時代遅れの古臭いことをいうのですか」といわれて、少し躊躇したこともあったけれど、この言葉は私の頭を離れなかった。

ごく最近、私はこれとそっくりな言葉に出くわした。細川護熙氏（日本新党首）は「日本の精神は《ノーブル・スピリッツ・シンプル・ライフ》である。高貴な精神、簡素な生活というものが、いつの時代にもベースであって、それこそいつの時代にも変わらない日本人の美德だと思う」と説いていた（文芸春秋、1993年新春特別号）。彼は、ワーズワースの言葉を知っているのだろうか。

景気回復のきっかけは、個人消費の増大にあるということも本当かも知れない。科学者にとって、環境問題に対応する材料・システムを開発することも責務であろう。しかし、それだけでは、しょせん堂々めぐりであって、いたちごっこではなからうか。南北格差、環境汚染、地球温暖化などなど、多くの困難な問題に対処し、人類の平和を希求していくためには、われわれの根底において《暮しは低く、思いは高く》の精神こそが重要であると思う。

\*Toshio FUKUI

1931年6月23日生

1958年大阪大学大学院理学研究科生物化学専攻修了

現在、大阪大学産業科学研究所所長、教授、理学博士、生化学

TEL 06-877-5111